

愛隣館研修センターニュース 第77号

〒612-8141 京都市伏見区向島二ノ丸町151 2F TEL 075-621-3849 FAX 075-621-1579

E-mail : airinday@sunny.ocn.ne.jp <http://www.airinkan.net> 振替 01020-5-39321

編集発行所：社会福祉法人イエス団 愛隣館研修センター 発行責任者：平田 義

わじわじするうへー！ わじわじするうへー！！ ～美ら海に基地はいらない！！～

歴史的な政権交代がなされました。画期的なことだそうです。多くの人が今の社会に「change=変革」を求めた結果の表れであったでしょう。その期待に応えるように、政府与党はマニフェストに掲げていた「八ツ場ダム建設中止」「後期高齢者医療制度の廃止」「障害者自立支援法の廃止」「母子加算の復活」などを発表し、「コンクリートから人へ」の基本方針を貫いていく姿勢を一定見せました。しかし、「米軍普天間基地移設問題＝辺野古新基地建設問題」については、鳩山首相が「少なくとも県外移設」と公約したにもかかわらず、アメリカからの恫喝があったのか、未だに、結論へと導く糸口すら見えてきません。それどころか、政府与党の閣僚たちの間で、沖縄県民を愚弄しているかのような、好き勝手な意見が飛び交っている始末であります。また、政府の行政刷新会議の下で先日まで行われていた2010年度予算概算要求の事業仕分け作業の中で、「思いやり予算」が取り上げられた際には、基地従業員の給与についての「見直し」が決定されました。沖縄に基地を押しつけておいて、そこで働かざるを得ない人たちの給料をカットするとは言語道断であります。

日本の国土の約0.6%しかない沖縄県に、日本にある米軍基地の75%が集中しているのです。沖縄に行かれた方はよくお分かりだと思いますが、沖縄本島では、車で少し走らせれば基地のフェンスが張りめぐらされている風景を目の当たりにしますし、ヘリコプターや戦闘機の爆音が否応なしに耳に飛び込んできます。米軍の専用施設がある市町村が25市町村にもおよび、まさに「基地の中に沖縄がある」という形容も決して誇張した表現でないことが理解できます。基地があることで、米兵による凶悪な事件や墜落事故なども後を絶ちません。その沖縄に、また新たな米軍基地を美(ちゅ)ら海(ジュゴンの棲む海)を埋め立てて建設しようとしているのです。まさに狂気の沙汰と言えるでしょう。

そもそも辺野古に新基地を建設する発端になったのは、1995年9月に起きた米兵3名による忌まわしい少女暴行事件からです。この事件が明るみに出、沖縄の人たちの怒りが爆発しました。約8万5千人もの人々が、事件に対

する抗議と、基地の整理・縮小を求める県民総決起集会に集まりました。日米両政府は沖縄の「怒り」を鎮静化しようと、「沖縄に関する特別行動委員会＝SACO」を立ち上げ、普天間飛行場の返還など11の基地の返還を約束しました。ただ、その約束というのは、基地を返還すると見せかけて、新たに米軍基地を造り替えるというものでした。しかも、このSACOの合意に基づいて、辺野古に新基地建設するようになったように報じられていますが、実は、米海兵隊は、1966年にすでに辺野古の海に飛行場を隣接する大浦湾に軍港を造る計画を作成していた事実があるのです。普天間の代替施設建設という話は嘘っぱちだったのです。元々辺野古の海は「狙われた海」だったのです。ほんまワジワジ～する！(腹立つ！)

SACO合意から14年が経とうとしている今、辺野古の海に新基地建設のための杭1本も打たせていません。これは、沖縄県民のみならず、良識のある全国の人たちが、新基地建設にNO!!という明確な意思表示をしてきていることの結果なのです。

去る11月8日には、「辺野古への新基地建設と県内移設に反対する県民大会」が、宜野湾海浜公園で行われ、約2万1千人の人たちで会場が埋め尽くされました。沖縄タイムスによると、反戦運動家、故阿波根昌鴻さんの思いを今に受け継ぐ謝花悦子さんは「いつまで闘わなければならないのか。これが最後の大会になって欲しい」と話されたそうです。その通りだと思います。これ以上沖縄県民に負担を強いることは許されません。



銃らしきものを手に上陸訓練を行う米海兵隊員
11月8日午後0時23分沖縄タイムスより↑

私たちにできることは、新政権に対して、新基地建設の計画を白紙撤回し、世界一危険な普天間基地を早急に閉鎖し返還するように声を挙げ続けることではないでしょうか。

美ら海に基地はいらない！(平田義)

シリーズ「賀川豊彦」を語る②

前号に引き続いて、イエス団理事の賀川督明さんに、イエス団の創設者である「賀川豊彦」について語っていただきました。

賀川豊彦たちの中期事業

10月に開かれた韓国でのシンポジウムで会場から質問を受けた。

「賀川豊彦は敗戦のとき、敗けた、敗けた、と流して涙を流したそうじゃないですか。私はそれが許せない。あなたはどうか受けとめるのか」と。

「まずもって、豊彦が殺戮を許すことは、あり得ないと確信しています」「中国も韓国も同じですが、敗けたとき、日本もあらゆる都市が空爆で破壊され、母を失い、子どもを奪われ、あらゆる人が痛みの中にいました。その一つひとつの痛みに涙していたのだと思います」「『敗けた、敗けた』を『終わった、終わった』と読み替えることでしか理解はできません」と応えた。

シンポジウム終了後、さきの質問者が駆け寄り、「やっとつかえが取れました。ありがとう」と、しわだらけの手に握られた。そのとき、「部落の中にあっても、豊彦は目の前にいる『その人』『その子』に寄り添って生きてきた。これは確信です」ということができたら、と思った。しかし、そう言い切ってしまったら、今、鼻高々の自分がいるような気がする。

豊彦が差別文章を書いたことは、謙虚へと引き戻してくれる。「ひとづくり」という大義を楯にしてはならないと。

豊彦が灘の生活協同組合に送ったフレーズがある。

利益共楽、人格経済、資本協同、非搾取、権力分散、超政党、教育中心。この7項目は、現在、コープこうべがもっとも大切にしている中心思想となっている。

「教育」。賀川豊彦たちの中期事業は、この一言に尽きる。

「教育」が、「ひとづくり」が、「中心」なのである。人格経済を押し進め、搾取をしない、利益共楽する人格が必要なのだ。

関東大震災、敗戦と、最も混乱している時期にも、豊彦は保育園や学校を設立している。食べ物や住まいといった暮らしを支える事業に加えて、「ひとづくり」が立ち上がる。豊彦たちにとって、生活協同組合運動や労働運動、そして農民運動などの活動に境界線が無かったように、「ひとづくり」である教育もまた保育やケアなどの境界はなかったであろう。目の前にいる「その人」を愛することが、教育であり、保育であり、ケアなのである。豊彦たち、すなわちイエス団は、目の前にいる「その人」「その子」に寄り添って生きてきたのだ。

デモ(ノストレーション)が行きつく先の権利獲得だけでは労働者は救えない、と労働学校を設立。神戸のセツルメントの中核を担っていた診療所医師の馬島 倂(ゆたか)や遊佐敏彦、賀川ハルたちが、その設立準備に尽力する。

農民運動もまた、組合結成後のセクト闘争を見限って農民福音学校を始めた。杉山元治郎と

わざわざ自宅を隣りどうしに建築し、そこを開放して教室とした。その斜め向かいにつくられた「子ども預かり所」が、現在の一麦保育園である。そこには診療所も開設されたが、賀川ハルの妹である芝 八重が医療を担当している。さらに彼女は農民福音学校で講師も務めた。

ハルには2人の妹があった。八重は医師として、ハルに従って神戸の新川、長田のスラムに身を投じ、一麦を経て、岡山の長島愛生園の診療所に籍を置く。終生独身であった。

もう一人の妹の記録はほとんど知られていない。ハルとともにスラムで活動するうち、身体を壊し、天に召された。しかし豊彦によって、小説「一粒の麦」の主人公のパートナーとして彼女がモデルとして描かれている。ちなみに主人公のモデルになったのは、イエス団の番頭、武内 勝である。

ハルがイエス団の活動に引き込んだのは妹たちだけではない。自分の母親をさえ同士にしている。当時、イエス団で働く多くの人たちは、ハルの母親がつくった食事で健康を支えられていたのだ。賄い仕事がハルの母親の務めであった。

ハルの献身は自らに止まっていたのではない。片目をスラムに差し出し、妹を祭壇に捧げるハルの姿勢に、豊彦はタジタジであったろう。「共に生きる」「愛する」ということの深さを思い知らされたに違いない。孤児となり、実家や叔父の家で孤独に生きてきた豊彦が、ローガンとマヤスという宣教師の家族の愛に癒され、献身を決心し、実行した。しかし、真に「愛」に触れたのはハルと出逢ってからのことだろう。家族総出で事業を支えたハルは真剣に豊彦を愛し、また周りの人々を心から愛していた。ハルに愛された豊彦、否、ハルだけでなく多くの人の愛を受けた豊彦が願ったのは、愛を実践すること、愛する人を育てることであった。

しかし、豊彦が灘の生活協同組合に「非搾取」と書き送ったとき、この三文字にいったい何を込めていたのだろうか。自分が搾取する側にいるという自己批判だったのであろうか。(賀川督明)



←労働大学設立打合

神戸山手海員クラブで開催された大阪労働大学設立のための打ち合せ。左から遊佐敏彦、馬島倂。前列右から2人目がハル。

←農民福音学校

右の最前に座っている杉山元治郎の家の前。彼が農民福音学校の校長を務めた。

医療的ケアをめぐる現状
～前進と後退とのせめぎ合い～

篠原 文浩

「医療的ケア」という課題については、たびたびこの紙面でも取り上げてきたが、昨今様々な動きがみられるので、再度報告すると共に、そこから見えてくる課題と目指すべき方向について概観したい。

今、一番注目を集めているのは「特別養護老人ホーム（以下特養）における介護職による医療行為の実施についてのモデル事業」であろう。特養においてもこれまで、特に夜勤帯などを中心に、介護職が痰の吸引や経管栄養（主として胃ろう）に対応してきたという事実があった。それを追認する形で今年度途中から年末にかけて、各地でモデル事業が行われている。モデル事業の内容は①見える範囲での口腔内の吸引、②注入中の姿勢の保持・観察の2点となっている。このモデル事業は厚生労働省老健局で行われているのであるが、障がい福祉を担当する援護局が出した、家族以外のものが在宅において痰を吸引する際の条件とは余りにもかけ離れている。つまり「縦割り行政」の悪い側面が如実に現れていて、気管切開部からの吸引も「可」とする援護局の方針との乖離は大きい。また、特別支援学校教員が行うことができることとされている「注入」への対応も、今回のモデル事業では単なる「見守り」に過ぎず、注入が「食事」である人々にとって、それを「処置」と位置付けるような内容となっていて、明らかに「後退」しているとの印象を受ける。そしてこのモデル事業と抱き合わせで実施されるのが

「指導看護師」制度の導入である。介護職が医療的ケアに関わる上で「指導する」看護師に新たな資格を付与するものである。その仕組み自体はあって然るべきことかもしれないが、今回の介護職に認められようとする医療的ケア実施の範囲をみると、看護協会による抵抗が大きいという印象は否めない。

そういう状況の中で、昨年度より京都市は「介護職向けの医療的ケア実技研修」を予算化し実施してきた。政令指定都市では日本で最初の取り組みであり、是非他の地域にも広げていきたいところである。つまり、国レベルではまだまだ検討の俎上にも上っていない課題が、より現場に近い行政単位の中で「必要不可欠なもの」として認識され、当事者と支援者がともに安心して、快適に支援が展開される後押しをしようという動きが見え始めているという一筋の光も見える。また、自治体レベルで医療的ケア実施に向けて検討はしていなくても、自立支援協議会のなかで、「医療的ケア部会」を設置して政策提言しているという動きも各地でおきている。

医療的ケアは、単にその人がより安全に、より快適に日々を暮らしていくための支援の一つに過ぎない。それが、その人の「いる場所」によって区別されるのは日本国憲法第14条「法の下での平等」に反するわけであり、新政権が検討するとしている障がい者自立支援法の見直しのなかでも、きちんと整理され必要な施策が実施されるように、「関係性と専門性との歩み寄り」を目指して現場から、運動の中から訴えていかなければならないと改めて心に刻む日々である。

■ 2009年7-11月の行事報告 ■

詩人 柏木正行さん (1945-2006) の

魂に触れる ⑧

雪

雪が降る
雪が飛ぶ
そして雪が流れる
雪が積もる
白く冷たい雪が
ぼくの心に降り積もり
ぼくの心をすっぽりと覆う

粉雪が舞う
一塵の風にあおられて
煙のように粉雪が舞い上がる

—詩集 路 より
柏木正行著 明石書店

8/6 『遊隣』海企画

8/10-11 『遊隣』キャンプ

8/13-14 『遊隣』キャンプ

きれいだナア〜

8/16-17 向島伝道所

キャンプ

8/20 『遊隣』クッキング企画

見事な包丁さばき！↑

8/23 劇団ホルム公演

9/5 SIEA オリエンテーション

9/6 SIEA 開校式(第31回)1名がインドへ

9/7.8.9.11 BBQ in 愛隣館 浴衣で参加☆→

9/14-17 SIEA 濟州島セミナー

9/30 イエス団京都ブロック職員研修会

賀川督明氏にご講演いただきました

10/14-15 デイサービス泊旅行(長島) なばなの里にて↓

10/30-31 デイケア・シサム泊旅行(長島)

コーヒーカップって

楽しいネト→

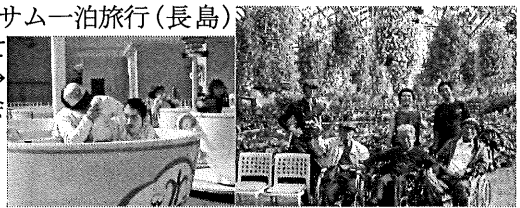
11/4 医療的ケア学習会

11/7 自閉症学習会

11/22 向島にっこり

フェスティバル！

今年のテーマも「交流」！子どもたちからお年寄りまで、多くの皆さまと楽しい交流のひとつときでした。賀川豊彦献身100年のパネル展示もやりました！



ヘルパー募集

- 内容 ■ 障がい児・者ホームヘルプ事業「ゆうりん」での移動支援・居宅支援
 資格 ■ 要ヘルパー資格
 時間 ■ 8:30-17:30の間 週2日からOK! 時間・曜日相談に応じます
 時給 ■ 1100円
 待遇 ■ 交通費実費支給(上限20,000円)、昇給有、自転車・バイク通勤可

クリスマス献金のお願い

当センターが、この向島の地に誕生してから、早くも30年が経過しようとしています。今日まで、皆様方のご理解とご支援によって支えられ、活動を続けることが出来ましたこと、心より感謝します。

新政権が誕生し、新しい時代へと移り変わっていく期待が膨らんできています。長妻厚労相は、就任後、稀代の悪法である「障害者自立支援法」の廃止をいち早く公表いたしました。今後、「障がい者総合福祉法」が制定されるという話ですが、具体的にはどのような制度になっていくのかは明らかにされていません。障がいのある人が、あたりまえに地域で安心して暮らしていくことができるような制度となるように、声を挙げていきたいものです。

しかし、どのような法律や制度ができたとしても、隙間はできてしまいます。私たちは、その隙間を埋めていく働きを、これからも続けていきたいと願っております。その働きのために、皆さまからのご支援、ご協力をお願いいたします。

これまでも皆様方には多額の献金をして頂いているにもかかわらず、新たなお願いをさせて頂くのは、誠に恐縮ですが、今年度も「愛隣館研修センター・クリスマス献金」にご協力頂きますよう、改めてお願いを申し上げる次第でございます。

クリスマス献金、目標金額 **3,000,000 円**

※口数、金額ともに任意です。

送金方法 郵便振替 01020-5-39321

口座名：社会福祉法人イエス団 愛隣館研修センター



☆お知らせ☆

▽愛隣館研修センターは、十二月二十九日～一月三日まで冬期休館日とさせていただきます。

★編集後記★

▼「77号・冬号」完成！◇一年は早いものです◇来年こそは、一日一日を大切に過ごしたいものです：◇皆様からのご感想に励まされております◇今後ともお聞かせ下さい(◎)

★所長より★

▼今年の流行語大賞は「政権交代」となったそうだが◇政権交代という大きな社会の変化が一時の「流行」になってしまわないように願いたいものだ◇昨日のニュースで「普天間移設問題」の年内決着は先送りされたとの報道があった◇辺野古以外の移設先を考えるように、外相や防衛相に指示を出したらしい◇鳩山首相が、日米の合意よりも社民党との連立を大切に考えたとの報道であった◇アメリカからは「鳩山は日本の盧武鉉(フ・ムヒョン)」かと揶揄されているらしい◇アメリカと一定の距離を置き、濟州島四三事件について国家の過ちを認め、濟州島民に対して公式謝罪を行った盧武鉉と同じと言われていたのだ◇結構なことではないか◇政権交代とは、こういうことなのだ◇これまでの日本とは違うのだ◇いつまでもアメリカの言いなりになることはないのだ◇大切なのは、人が本当に大切にされる社会が作りだされていくことだ◇「友愛」精神を貫き通して欲しいと願っている(ひ)